
月光と暗闇

風林火山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光と暗闇

【Nコード】

N8960B

【作者名】

風林火山

【あらすじ】

英と沙月の定められた運命と未来の希望を描きました。

第1話：最高の涙

「面倒くせ」彼女との喧嘩が始まった。俺の名前は、英、彼女の名前は、沙月さつきと言う。

俺達は付き合って二年になる。そんな彼女といつもお決まりの些細な喧嘩。付き合い当初は喧嘩なんて全くしなかったのだが、時を重ねるにつれ段々すれ違いが生じ喧嘩が多くなった。

俺達は意見が一致しない、趣味も好きな事も何一つ合わない。占いでモダントツで相性最悪。別れようと何回思った事が…でも、そのたびに頭に浮かんでくるのは彼女との幸せな日々。俺は一大決心をする。

ドライブと言って夜、彼女と海に来た。

海に着いて彼女は笑顔ではしゃいでる。

「海ってなんか心が落ち着く、波の音が綺麗。」彼女の横にすわり、「あのさ…」彼女の視線が俺に向く。俺はそれに答えるように彼女を見つめ

「俺の妻になつてくれ…結婚しよ」

一緒に周りが静寂に包まれた。

「嬉しい、私あなたと結婚したい」

婚約指輪も何もない言葉だけのプロポーズ。

最高のムードの中、彼女の涙が一粒…

しばらく二人は海を眺めながら寄り添っていた。

第2話：喪失と過去

闇の中の僕達を月の光が包み込み、海の香りが僕達を受け入れる。

波の歌に耳を傾けていると、

「寒くなつて来たね、そろそろ帰ろ。」体を小さく丸めている沙月が小さな声で言った。

「同感、帰ろ」僕は少し寒いかな？程度だったが、少し眠気もあり意見一致で帰ることになった。

帰りの車の中では二人とも無言のまま沙月の家に着いた。

「明日、改めて沙月の親に挨拶に行くからね、おやすみ。」別れ際軽くキスをして俺は自宅に向かうはずだった。しかし、喉が乾いていたのか、無性に飲み物が飲みたいという衝動に突き動かされ、コンビニまで買いに行くことにした。

コンビニまでは大した距離ではないのだが、突然の睡魔に襲われ運転中にも関わらず寝てしまった。

耳障りなサイレンの音、体に感覚がない…

「ひ…ひで…英っ」遠くに声が聞こえる。沙月？次の瞬間、意識が無くなった。

…死んだのかな…しかし何故か体の感覚も意識ももどっていた。しかし、目を開けたら今までいた世界とは全く別の世界だった。

闇の羽が生えている者と、光の羽が生えた者が、怒り・悲しみ・憎みを顔に表し争い続けている。そお…天使と悪魔の戦争。

訳がわからずその場に立ち尽くしているとそこに壊れたガラスがあつて自分の全身が移し出されている。その姿を見て足が震え出した。

髪はボサボサ、体中に怪我をし、服は上下黒でボロボロ、でも、驚いたのはそれじゃなくてなんと、自分の背中から闇の羽が生えていたのだ。

…俺、悪魔なのか？

第3話：正体

「なんだよコレっ。どこなんだよっ。」自分が今居る場所も自分が誰なのかもわからないままその場所に立ち尽くしていた。

この先何が起こるかわからない。

「どうしょ。」

何も考えられないでいると、辺りが急に明るくなって、一人の人間が現れた。

金髪で白い服を身に纏い、背中には白い羽が生えている。まるで天使のように。

「奇襲成功。」

悪魔界一強いあなたをこんな姿にできるとは夢にも思いませんでしたよ。なあ、ノワール。」

「ノワール？」今あいつそう俺にいったよな。

「ボロボロになりすぎて声も出ませんか？
なら、とどめを刺すまで。」

奴は、腰にさしていた剣を抜いて猛スピードで俺の方に突進してきた。

まさに斬られると思った瞬間、体が勝手に動き自分の腰にさしていた剣を抜いていた。

傷は深くないが、奴の剣を持つ右手を斬っていた。

「そんな体でまだ抵抗できるとは。
流石ですね、今は退かせて頂きます。」

奴はその場を立ち去ろうとした。

「待て、お前は誰なんだ。」
必死に奴を呼び止める。

「なに、忘れたなんて言わせませんよ。あなたは私の父上を殺した。
絶対に敵をとつてやる。」
そう言っつて俺を睨むと、そのまま去ってしまった。

訳がわからない、

「俺が殺した？」

頭の中が真っ白になった。

「おいつ、大丈夫か？」
いきなり後ろから肩を叩かれる。

「なんだよビックリすんじゃないかねえか」
と言つて後ろを振り向くと、黒い羽が生えた大男が立っていた。

「誰だつ。」

俺は大男から体を離した。

「戦友に向かつてそりやないだろノワール。」
呆れた感じで俺を見ている。

「戦友？」

「ノワールって誰なんだ？ここはどこなんだよ。」
訳がわからず怒鳴っていた。

「お前、さっきの奇襲で頭打ったか？
ノワールってのはお前さんの名前だよ。
そんで俺がゼロだ。」

ここは地界っていつてな、お前はここの王子だよ。
俺達は今、天界の奴らとの戦争中なんだ…それで今天界のやつらが
奇襲してきたつて訳。」

今の俺に必要な最低限の説明をもらった。

「ちあ帰るぞ。」

ゼロの肩に掴まると空に飛び上がった。

体中に浴びる風が凄く気持ちよかった。

第4話：再開

「着いたぜ、ここがお前の家だ。」

目の前にはドラキュラ城みたいな城が聳え立っていた。

「ゼロ…俺の親父は吸血鬼か何かか？」

ゼロは啞然とした表情で俺を見ている。

「何言ってるんだ？お前の親父さんは悪魔界最強の王じゃないか、ついでに言っとくがお前の母親と妹は悪魔界の三大美人に選ばれるくらい美人さんだ。羨ましいかぎりだよ。」

「羨ましい？まあ家族の事を誉められるのは嬉しい…けど、その中に俺なんかいていいのか。」

「親が心配してるぞ、早く顔見せてやれノワール。」

ゼロに背中を押され中に入る。

城の中に入ると言葉を失った。
絵に書いたような、まさに豪邸そのものだ。

「兄様！！どうなさったのその傷。母様大変、兄様が。」

美しい女性が走って来て心配そうに俺のことを見つめている。

「ノワールどうしたと言うのですこの傷は？すぐに手当てを……」

もう一人女性が来たかと思うと俺の手を取り、優しく撫でてくれた。

俺は応急室に連れていかれ応急処置を施してもらった。

だいぶ疲れていた俺は

「少し休みたいんですが……」
と他人行儀で言った。

「そおね、マリー部屋まで着いて行ってあげなさい。」

「はい母様。」

妹のマリーに部屋まで連れて行ってもらい、着替えている時に、

「ノワール…無事でよかった。お前が行方不明と聞いた時は頭が真っ白になったが、本当によかった。今はゆっくり休みなさい。」

「あ…ありがとう。」

多分父親だろう。こんなに俺のことを相当心配している。

俺はベッドになだれ込んだ…と同時に深い眠りに入ってしまった。

第5話：出会い

「沙月っ…」

「兄様大丈夫？…さつきって誰？」

どれだけ寝ていたんだろ、沙月？無意識の内に出た言葉だった。

「…誰だろ。」

「変な兄様。

体の具合は大丈夫？」

妹のマリーが俺の顔に近すぎるくらい顔を近づけて来て、心配そうに見つめてる。

「大丈夫。」

マリーの体を少し離してそう答えた。

「父様のところに行きましょ。目が覚めたら話しがしたいって言う」

てたわ。」

「マリー、連れて行ってもらえるか。」

まだ体がだるかったが、この城の事・皆の事・今どついう状況なのか全て記憶にない俺は、父親にいろいろ聞いてみよつと思つた。

「ここよ兄様。私はまだ母様のお手伝いが残つてるから行くね。」

「ありがとうマリー。」

ブロンドの髪をなびかせながら歩いていくマリーを見送つた後、父の部屋のドアをノックした。

「…」

返事がない。

ノックを何回か続けた。

「父さんノワールです。いないんですか？」

また返事がない。

何回かノックしたけれど返事がないのでドアノブに手をかけようとした。

その時、ドアが勝手に開き体が部屋の中に引き込まれた。

暗闇の中に入ったと思ったら一瞬にしてロウソクに火が灯り目の前に父親が立っていた。

「ノワール元気そうだな。お前が戦闘でこんなになるなんて珍しいじゃないか、なんかあったのか？」

父は俺の心を見透かしたような目で俺を見ている。

「すみません：何もかも記憶にないんです。気付いたら変な所で立っているし、変な奴に襲われるしで何が何だか…。」

「記憶がないか。まあ時間が絶てば記憶も戻るだろ、それまでは過去に捕らわれずこれからの記憶を大事にしなさい。」

もっと何か聞きたいはずなのにその一言で十分だった。

「俺はこれから何をすればいいのでしょ？」

「お前の好きな事をすればいい。そう言えばお前はピアノを弾くのが上手かった。屋敷を出て、庭を北に少し歩いた所に置いてある。久々に聞いてみたいものだな。」

「そうですね、ありがとうございます。早速行ってみます。」

父の部屋を出て、庭に向かうことにした。

庭を歩いていると木々が変なん形をした所を見つけた。そこに向かってみると、純白のピアノが置いてあった。

「ドラキュラ城には合わないな。」

そう思いながらもピアノの前に座る。

記憶が無いため何をどう弾いていたのかわからなかった。

鍵盤に指を置いてみる。懐かしい感じがし心が澄んでいく…その時、指が勝手に動き曲が頭の中に次々に浮かんできた。

「弾ける。」

喜びと感動から夢中になってピアノを弾いていた。

気付いた時はもう日が落ちようとしていた。

「素晴らしい曲ね、何て曲かしら？」

後ろを振り向くと美しい純白の女性が立っていた。

「あなたは？」

「私はルミエール。光族の者よ、あなたとは敵同士になるのかしら。」

純白の女性はそう言うと微笑んだ。

「タイトルはないんだ。ただ頭に浮かんだ曲を弾いていただけだから。」

その女性からは殺気が感じなかったから普通に話せた。

「なら…終焉なんてどう？」

「終焉か…。」

この曲でこの戦争が終わってくれればいいけどな。

俺は微笑みながらそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960b/>

月光と暗闇

2010年10月28日07時00分発行